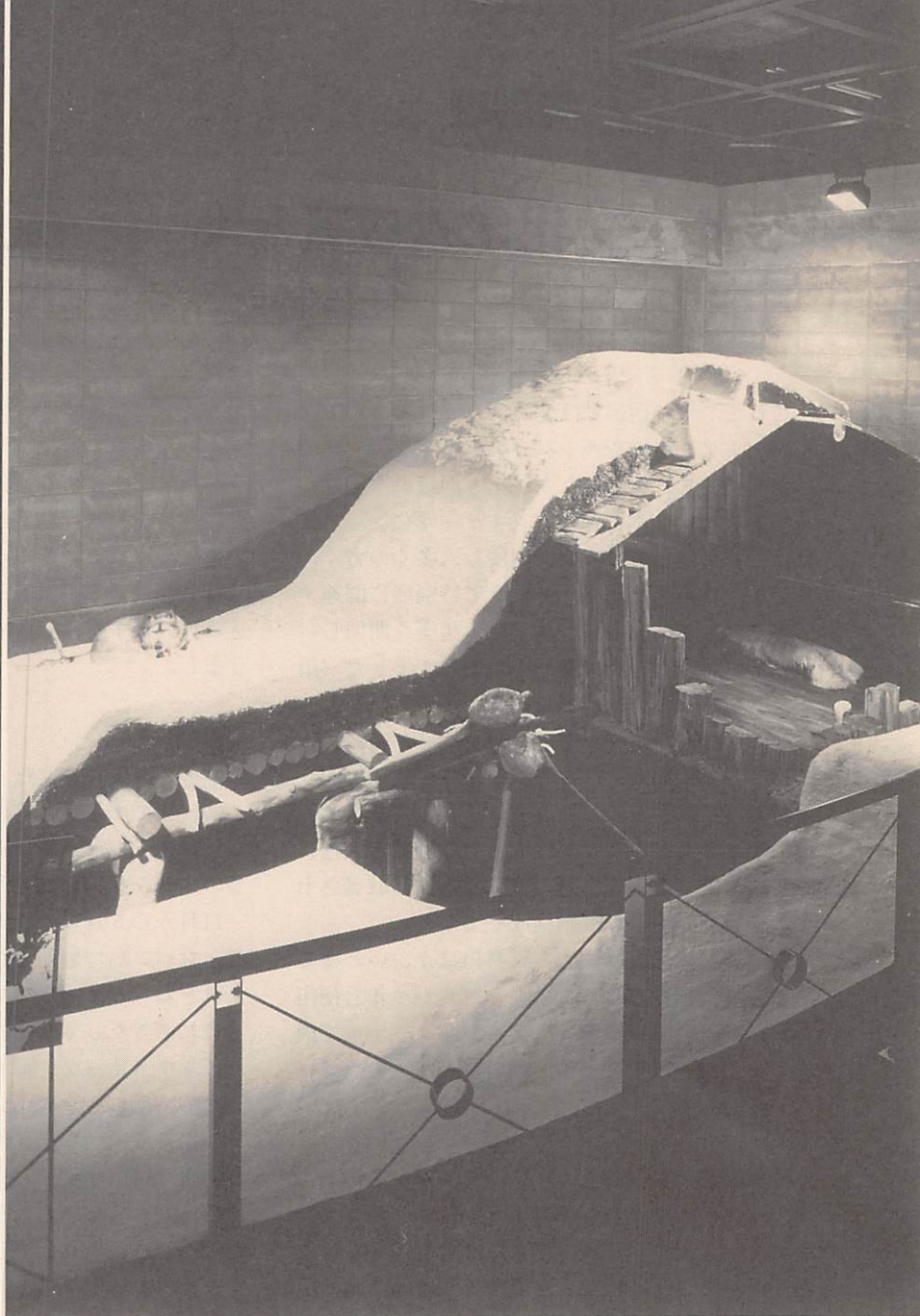




時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる

北方民族博物館はユーラシア、北アメリカ、
グリーンランドの先史時代から現代まで、
北方文化を対象とする博物館です。

北方民族博物館だより

— 第4号 —

「アイヌ文化にみる猟と漁」について

これまでの特別展では北アメリカのイヌイト、インディアン諸族や西シベリアのネネツの文化の一端を紹介してきましたが、第3回目の今回は、「アイヌ文化にみる猟と漁」をテーマに、2月8日から3月15日までの期間開催し、多くの方々の来館をいただきました。あわせて特別展に関連する事業として、会期中に講演会、講座を開催し、それぞれ多くの方々の参加をいただきました（講演会、講座については別に紹介します）。

アイヌは北海道をはじめ千島、サハリンに暮らし、漁撈や採集によって生活していた民族ですが、本特別展では、とくに北海道アイヌの生業活動、そのなかでも、主要な部分を占める狩猟と漁撈に焦点をあて、北海道各地の博物館施設に収蔵されている資料を中心に展示構成しました。

展示資料には民族、考古資料のほか、いわゆるアイヌ風俗絵といわれる絵画、写真パネルも使用しました。総数142点の資料を4つのコーナーで構成しました。以下にそれぞれのコーナーの概要について記します。

陸獣狩猟

アイヌの人々はおもにエゾシカ、エゾヒグマ、キタキツネ、エゾリス、ウサギなどを捕獲の対象としてきました。秋から春先までが狩猟活動の中心でした。なかでもエゾシカは、かつては北海道の各地に生息しており、遺跡から出土する動物骨からも、最もおおく捕獲されていたことがわかるように、北海道に暮らしてきた人々にとって重要な資源であったのです。川や湖、崖、深雪に群れを追い込み、弓や槍、棍棒で捕獲しました。また、冬眠穴の中や穴から出たばかりのエゾヒグマは、毛皮や熊胆という交換価値の高いものをもたらしました。

狩猟具には、その主力となる弓矢のほか槍、仕掛け弓、各種のワナがあります。クマやシカといった比較的大型の動物の捕獲には、トリカブトの

根からとった毒を塗りこんだ、竹や真鍮で作られた罠を用いました。

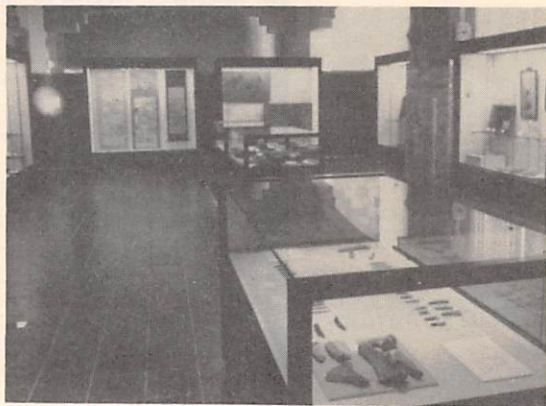
展示は、上記の狩猟具のほかカンジキ、シカ笛、矢箱、矢筒、携行品としての物入れ、喫煙具などで構成しました。幕末から明治のはじめにかけて活躍した画家・平沢屏山が、穴グマ猟、シカの追込み猟の様子を活写しているアイヌ風俗絵を展示しました。

海獣狩猟

高度な海獣狩猟文化をもっていたといわれるアイヌ民族ですが、とくに道南部の噴火湾で行われていたオットセイ猟、道東部・オホーツク海沿岸でのアザラシ猟が知られています。

11月から5月にかけて、噴火湾にはサハリン東部・ロベン島で繁殖したオットセイが滞留します。これをねらって沿岸のアイヌの人々は板綴り舟で沖合に漕ぎだして銚を打ち込み、捕獲していました。一方、オホーツク海沿岸のアザラシ猟は、春の流氷の時期に、氷の上ののって休息しているアザラシに舟で近づき銚を使って捕獲するものでした。

板綴り舟（模型）、あか汲み、噴火湾岸やその他の地域から収集された回転銚、オットセイをかたどった「数取り」などでこのコーナーを構成しました。



漁 撈

河川は、アイヌの人々の漁撈活動の中心の場でした。沿岸部では釣りやたも網漁がおこなわれていました。また、噴火湾から日高にかけての太平洋沿岸では、メカジキやマンボウなど大型魚を対象とした鉈漁もさかんに行なわれました。

河川の漁では、春から夏にかけて遡上するカラフトマス、8月から12月にかけて遡上するサケがおもな対象とされ、そのほかの魚種（サクラマス、イトウ、ウグイ）をあわせると、ほぼ年間を通じて食料を確保することができました。川をせき止めたり、籠罟を仕掛けたり、鉤で突いたり引っ掛けたりといった漁法がとられました。

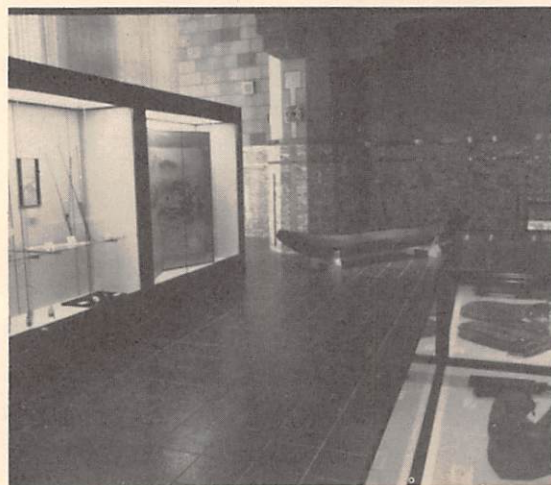
展示は、鉤鉈、鉤、サケの頭叩き棒、夜間に漁をするための灯火として使われた白樺樹皮製の松明、丸木舟模型、魚皮製の靴、鉤鉈魚を描いたアイヌ風俗絵などで構成しました。

発掘された「アイヌ文化」

オホーツク海沿岸に暮らしたアイヌの人々の海獣猟と陸獣猟を裏付ける資料に、近年の発掘調査からもたらされた出土品があります。17～19世紀初頭に形成された貝塚などの遺跡から発見されたものです。豊富な骨角器と、動物遺存体（土中で腐り切らずに残っていた骨や歯、角など）に特徴があります。鉈先は鹿角やクジラの骨を加工したもので、先端に金属の鏃をはめ込むものもみられます。アザラシ、オットセイ、シカなどの遺存体も多量に出土しています。

このような考古学的な調査の成果は、この地域の狩猟伝統をしめす貴重な資料であるとともに、民族誌に記されたことを裏付け、さらに文献に記されない時代・地域のアイヌ文化を確実に位置付けられるものとなっています。

このコーナーでは、当館がある網走市と隣町小清水町に所在する貝塚から発見された鉈先をはじめ、鉈先の未製品、矢や鉈に用いられる中柄、



キセル、小刀の刀身などを展示しました。また千歳市の17、18世紀に形成された低湿性遺跡から発見された鉤鉈の台木、ヤス、小刀の鞘、あか汲み、荷縄、櫂などの写真パネルを併せて展示しました。

本特別展でとりあげたアイヌ民族の狩猟、漁撈といった生業活動には北部ユーラシア、北太平洋沿岸地域の狩猟民文化と共通する要素が多く含まれています。北方諸民族の狩猟や漁撈、採集、トナカイ飼育などの生業活動、クマ送り儀礼などの精神文化を広く扱った当館常設展を併せて観覧いただいた方々には、少しなりともアイヌ文化の理解の助けにさせていただけたことと思います。

(学芸課 青柳 文吉)

●訂正とお詫び

本特別展にあわせて作成しました図録「アイヌ文化にみる猟と漁」中、18ページの図版キャプションは、左が 51 アイヌ狩猟之図、右が 50 アイヌ狩猟図でした。訂正してお詫びします。

アイヌ民族と北方諸民族の文化交流

講師／北海道大学教授 菊池 俊彦氏

13世紀から19世紀にかけて、東はカムチャツカから、北はアムール川下流域にかけて縦横無尽に活躍していたアイヌ民族について、3月8日の講演会で東洋史および考古学の立場からお話していただきました。以下にその要旨を紹介します。

アイヌとカムチャダールの交流

考古学的な事実から

今世紀の初め、ロシアの探検隊のヨヘルソンはカムチャツカ半島のクリル湖岸で3枚のコインを発見した（後にこれは1636年に初めて造られた寛永通宝であるとわかる）。また、馬場脩はシュムシュ島、パラムシル島で寛永通宝を発見している。その後、デコワは、ロパトカ岬の貝塚から同じく寛永通宝を発見している。このとき、北海道の15、16世紀の遺跡から発見されるものと同じ型式の内耳土器、回転式鋳頭もみつまっている。

歴史的な資料から

17世紀末、カムチャツカ半島を探検したアトラソフは、次のような報告を残した。カムチャダールの住んでいる南に、これとは違ったクリルがいて、彼らは柵を作って住んでいる、と。また18世紀初め、コズイレフスキーは、千島列島の島々の情報のなかで、北端のシュムシュ島から松前島（北海道）までクリル人が住んでおり、彼らは日本人から得た絹織物、木綿、鍋、刀、陶器、漆器をもって交易にやって来て、ラッコ、キツネ、ワシの羽をもち帰る。またクリルとカムチャダールは平和的に通婚関係を結んでいる、とした。

クリルとは明らかにアイヌ民族を指していることから、考古学的な調査から見つかった寛永通宝や、鋳頭、内耳土器が北海道からもたらされたと考えても何ら不思議ではない。このように確実に15、16世紀にさかのぼれる千島列島へのアイヌ民族の進出だが、それ以前には遡ることはできないであろうか。

3、4世紀からサハリン、北海道、南千島にあったオホーツク文化は、北海道ではその終末（13世紀ころ）には、土着の擦文文化に吸収・融合されて姿を消し、この擦文文化もまもなく「アイヌ文化」

にかわる。オホーツク文化の圏内にあった千島列島ではこの文化が消えた後、空白とは考えにくいことから、恐らくアイヌ民族は13、14世紀から千島列島、カムチャツカ半島にまで進出し、勢力を拡張（Expansion）したと考えられる。

アイヌ民族とアムール川下流域・サハリン北部の諸民族との交流

19世紀初めの間宮林蔵の記録によれば、アムール河口の山韃夷（ウリチ民族をさしている）は、サハリンにもデレン（満州仮府）にも来て交易をしている。サハリン島のクイ（アイヌ）はクロテンやキツネの毛皮をもって、デレンに赴き錦を手にいれていた、とある。

遡って18世紀清朝期でもクイは毎年テン皮を献上していたし、明王朝はサハリン島に3か所の衛を設け、土地を支配するとともに産物である毛皮を徴収していたのである。

さらに遡って元朝の記録には、サハリンの骨嵬（アイヌ民族）は、14世紀の初め元朝の支配下に組み入れられ、毛皮貢納していたことが記されている。以上のことからサハリン・アイヌは元、明、清に長年に渡って毛皮を貢納し、みかえりに錦をはじめ玉、キセル、タバコ、針などを手にいていたのである。

元朝の支配下に組み入れられる以前、13世紀末ころしきりに元軍と戦っていたクイは、一体何時からサハリンにいたのか。サハリンにあったオホーツク文化の担い手がアイヌ民族だったとは形質的にも考えにくいし、13世紀までは、確実にサハリンにオホーツク文化があったわけだから、サハリンにアイヌ民族が存在するわけがない。アイヌ民族がここに住み着くようになったのは、13世紀の半ばかそれ以降ということが考えられる。北海道から北へ進出したことになる。

以上のようにアイヌ民族は、五、六百年の間にわたってカムチャツカ交易、アムール川下流域交易をおこなっており、そして東から得たラッコ皮を、北から得た錦（いわゆる蝦夷錦）を松前にもたらしたのであった。

アイヌ語史試論—方言から歴史へと

講師／千葉大学助教授 中川 裕氏

平成3年度最後の講座を、千葉大学助教授中川裕氏を講師に3月15日開催しました。中川氏は、アイヌ語、アイヌ文学を専門にしています。フィールド調査で録音したテープなどをつかってお話しいただきました。

以下に講座の要旨を紹介します。

方言から歴史をさぐる

アイヌ語が記録されている文献は、どんなに古くても17世紀のもので、古文書にたよってアイヌ語の歴史を考えるには限りがある。他の手段としては、方言から歴史を考える方法がある。

方言から歴史をさぐる方法には『比較言語学』と『言語地理学』の二つがある。

このうち『比較言語学』はいろいろな方言の音の違いを比較して、もとの音がどのような形をしていたのかを考える方法である。

言語地理学で考える

『比較言語学』では、その方言がどの場所ではなされていたかは問題にされない。これに対して『言語地理学』ではどの場所ではなされていたかが問題になる。

星には図1のように三つのよびかたがある。この三つのうちどれが一番古いのかを考えてみる。

ノチウ *nociw* (*nocuy*, *noociw*) が使われている

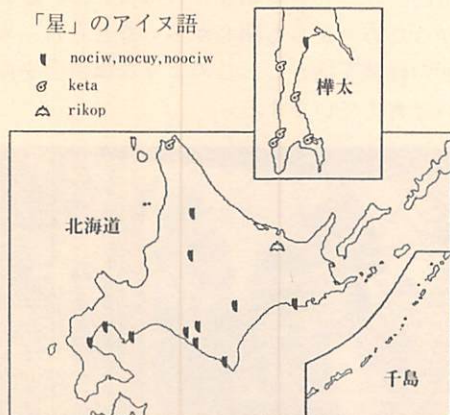
のは、樺太の一部と北海道である。樺太南部には *ketaketa* が分布している。これから、ノチウといういいかたがもととあったところに、樺太で *ketaketa* といういいかたが発生して、ノチウが分断されてしまったと考えることができる。

しかし、こうしたことばの分布だけではなく、そのことばが何を指しているのかを考える必要がある。

北海道で『節のない昔話』を指すことばには、“ウエペケレ *uepeker*” と “トゥイタック *tuytak*” の二つがある(図2参照)。ところで樺太でトゥイタハは『節のある昔話』を指している。また様以のトゥイタックで節がついているものがある。トゥイタックの分布の両端では、トゥイタックが『節のある昔話』を指していることから、トゥイタックは本来『節のある昔話』を指していたが、節のないトゥイタックというものが発生し、ひろまったため、トゥイタックが『節のない昔話』のことを指すようになっていったと考えることもできる。

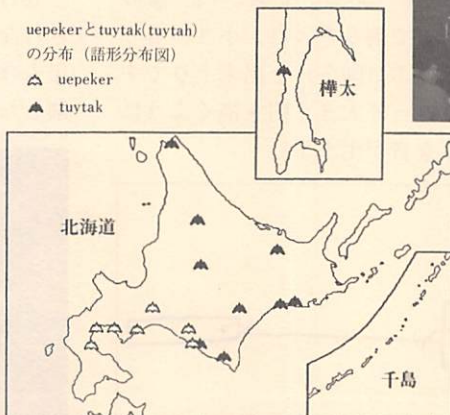
アイヌ語の歴史は、いまある方言をつかっていろいろと推測していくことが可能である。しかしものの名前だけをおいかけのではなく、それが何をさしているのかを調べないと、本当の言葉の歴史そのものはわかってこない。

図1



知里真志保・服部四郎『アイヌ語方言の基礎語彙統計学的研究』
『民族学研究』24-4 (1960) より作成

図2



服部四郎編『アイヌ語方言辞典』(1964、岩波書店)に、中川の個人的データを加えて作成。



(配布資料)

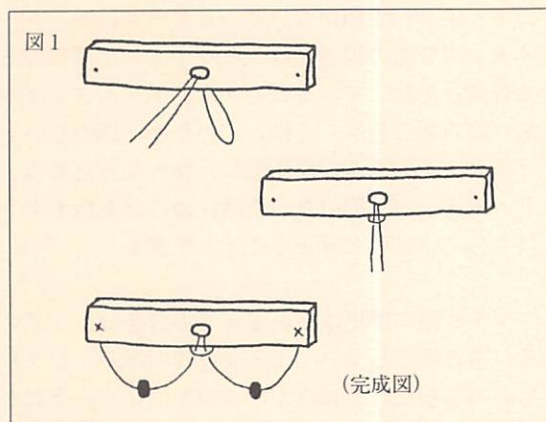
○平成3年度第4回講習会 北方民族の玩具

講師／笹倉 いる美(当館学芸員)

イヌイトの「知恵の輪」と「うなり板」を作る講習会を1月12日に開催しました。ちょうど冬休み期間中ということもあって、会場は小学生とその父母ら30名でいっぱいになりました。作り方について、以下に紹介します。

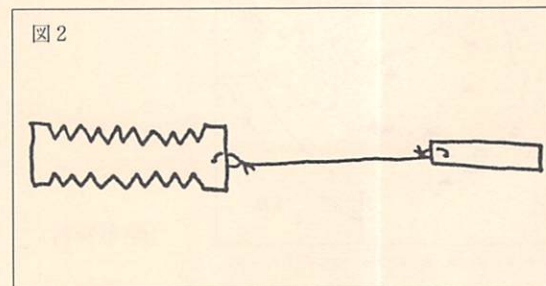
＜知恵の輪＞

材料は、板(長さ20cm、幅3cm)1枚、ひも(70cm)1本、ビーズ2個で、作り方は図1の通りです。この状態から、ひもを解かず左のビーズを右に移動します。当日の参加者のうち解答を聞く前にできた方は一人もいませんでした。みなさんもぜひお試しください。



＜うなり板＞

材料は、板(長さ10cm、幅3cm/長さ10cm、幅1.5cm)各1枚、てぐす(50cm)1本です。幅の広い板の縁にカッターで刻みを入れ、小さいもう一方の板とてぐすで結ぶ(図2)と出来上りです。小さい板をしっかり握って大きく円を描くように回すと、うなるような音が出ます。



○平成3年度第5回講習会 イヌイトの雪の家 (イグルー)

講師／佐々木 亨(当館学芸員)

年度内最後の講習会として、2月23日午後1時から「イヌイトの雪の家作り」が行われました。

まず講堂でのレクチャーでは、イグルーについての二つの誤解、つまりイグルーとはイヌイトの言葉で「冬の家」全般を指しドーム型の雪の家のみを言うのではないこと、冬季間雪の家を主たる住居として用いるのはカナダ中部の極北地域に限られ、他の地域でも用いられることはあるが一時的なものであることについて指摘しました。次に、図を用いたり、イヌイトが雪の家を作るビデオを見ながら作り方を説明しました。

その後、屋外駐車場に出て、家族やグループで参加された方など4班に分かれ、講師の指導のもとイグルー作りに取り掛かりました。下の二、三段くらいまでは事前に作っておいた雪のブロックを螺旋状に積みましたが、小さな子どもには湿った雪が重すぎて運ぶのにひと苦労、大人のほうが真剣になっていたようです。上部は切り出した雪を使いましたが、なかなかうまく傾斜がつかず、丸い屋根にならないイグルーもありました。

1時間あまりでほとんどのイグルーが完成し、中に入ってみると意外と明るく暖かで、イヌイトの知恵に感心し、その生活を想像しました。また、実際に作ってみると、ビデオで見て頭に描いていたより難しく、北海道と極北地域との雪の質やかまぐらの作り方との違いも実感できました。

翌日道内のニュースで紹介されたことで、参加されなかった方々からも関心が多く寄せられ、来年も今回の経験を活かし、このような講習会を開催したいと考えています。



本シンポジウムは、文部省科学研究費補助金「重点領域研究」のプロジェクトとして行われてきた3年間の“先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略”の研究成果を公開する場として、東京大学山上会館において開催されました。現存するホモ・サピエンスを遺伝的形質によって類型化した集団の一つであるモンゴロイド集団の起源や拡散の過程の解明を目的とする本プロジェクトは、多角的な研究領域を取込んだ総合的なアプローチにより大きな成果をあげつつあります。それらの一部は、雑誌やテレビ番組など一般向けの媒体をつ

「先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略」

1.13~15 於：東京

うじても公開されてきています。

本シンポジウムでは、総括的な研究紹介も含め48の研究発表が行われました。主として考古学的なデータからアジア、新大陸、オセアニアにおける先史モンゴロイド集団の拡散過程の分析、人や動物の骨、植物などの同位体分析から年代やヒトの食生態、生態環境などをあきらかにする諸研究、形質人類学や遺伝学、免疫学などの手法によるモンゴロイド集団の起源や系統の分析、また古環境の復元、コンピュータの活用による拡散モデルの構築の試み、以上の成果を総合化して研究目的を解明するための拡散シミュレーションモデルの検討などが報告されました。この学際的なプロジェクトの最終的な成果は、会場の熱気からも大いに期待されるところです。(学芸課 渡部 裕)

北方諸民族の芸能に関する研究成果を総括するとともに、各民族が伝承している民族芸能を披露し、民族の相互交流の進展に寄与するため、民族芸能交流とシンポジウム(北方諸民族芸能祭実行委員会主催)が1月20日から25日まで、札幌天神山国際ハウス、ランコシ生活館(千歳市)を会場に開催されました。

谷本一之氏(北海道教育大学長)の基調報告に続き、研究発表、討論、芸能フェスティバル、交流会などが5日間にわたり行われました。

発表題目、演唱者は以下のとおりです。

北方諸民族芸能祭

1.20~25 於：札幌、千歳

＜発表題目＞・L. カブラン(アラスカ大学)『溶け出した氷のカーテン：ベーリング海峡・文化交流の再生』・R. キーリング(カリフォルニア大学)『北カリフォルニアのヨロク族及び近隣諸部族に於ける音楽と文化の歴史』・Yu. シムチェンコ(ロシア民族学研究所)『旧ソビエト北方諸民族の現状』・M. ジョルニツカヤ(ロシア民族学研究所)『北方諸民族の踊りの総合的性格』・Yu. シェイキン(ノボシビルスク音楽院)『ツングースの音の文化』・E. メーサー(ベセル教育委員会)『アラスカ・エスキモー(ユピック)の儀礼』・A. ヴィクトール(アラスカ大学)『世界を探索するもの：イヌピアクとシベリア・エスキモーの踊り』・J.J. ナティエ(モントリオール大学)『極北世界のイヌイト、アイヌ、シベリア諸族の声のあそび』・大島稔(小樽商科大学)『環北太平洋圏でのエスキモー・アリュート、チュクチ、アイヌの民族言語学的位置付け』・岸上伸啓(北海道教育大学)『カナダ極北におけるニュー・エニシיתי』・楊志軍(黒龍江省民族博物館)『赫哲族の歌と踊り』・L. カマリグ(アラスカ大学)『映像による伝統的ユピック・ダンスの保存』(発表順、敬称略)
＜演唱者＞・J. ワギイ、D. ワギイ(イヌイト)・尤志賢(赫哲)・アイヌの文化伝承者の方々

(学芸課 佐々木 亨)

Q 常設展示室に復元している竪穴住居は、床から出入りするようになっていますが、どうしてこのようになっているのですか。

A 床から出入りするためには、外からの入口と床を結ぶトンネルのような通路が、床より低い所に必要になります。壁から出入りするタイプの住居ですと、冬季間、人が入るたびに寒い外気が室内に入りますが、

このタイプでは暖かい空気よりも重い寒気はトンネル内に溜り、あまり居住空間に入ってきません。つまり、床から出入りすることで保温性を高める工夫をしています。

このほかに居住空間を暖かく保つための工夫として、住居全体を芝土(永久凍土の表面に生育している短い草を含む粘土状の土)のブロックで覆う、また、出入り口以外の開口部を天窓と換気孔の2か所とし、で

きるだけ小さくすることもあげられます。(学芸課 佐々木 亨)



寄贈資料紹介

○仕掛け弓の矢覆い筒

網走市の寺田周史氏から、アイヌの仕掛け弓の矢覆い筒1点が寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から

贈呈をうけた書籍(1月～3月)

網野善彦 責任編集『東シナ海と西海文化/海と列島文化4』小学館 1992年
高橋和子『路傍抄:さいはての幻影』1992年

東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録:アイヌ民族資料篇』東京美術 平成4年

村井不二子他『アイヌ衣服の復元的調査研究』昭和女子大学 平成3年

Müller, Claudius und Wu Shun-chi eds. *Wege der Götter und Menschen. Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz* 1989年

主な来館者

- 2/9 中国瀋陽市一行6名
- 2/12 ピリオ・バリノロ氏(フィンランド大使館二等書記官)
- 2/13 ブラジル松柏学園使節団一行
- 2/15 上田恒夫氏(オホーツク生活文化振興財団理事長)
- 2/18 豊原熙司氏(財団法人アイヌ民族博物館学芸部長)
- 3/4 長谷部一弘氏(函館市北方民族資料・石川啄木資料館学芸員)
- 3/31 評論家 草柳大蔵ご夫妻

観覧者動向 1月～3月

(3月22日現在)

1月 787名
2月 3,101名



草柳大蔵ご夫妻

常設展示 1,970名
特別展示 1,131名
3月 2,791名
常設展示 1,839名
特別展示 952名

2、3月は、特別展及び網走市のオホーツク流水まつり開催などで300名を超える観覧者を迎えた日もありました。冬のイベントの大切さを実感した期間でした。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (1月～3月)

- 1/26 北極圏一周を目指す大遠征「アークティコス」、2月末ロシア・チュコト半島出発/AS
- 1/29 スウェーデンの写真家、写真集「アイヌ」を自費出版/D
- 1/29 余市町大川遺跡から、9世紀頃の墨書土器3点、道内で初めて出土/Y
- 2/4 アイヌの長老 貝沢正氏(道ウタリ協会副理事長)3日死去/AS
- 2/16 第4回アイヌ民族文化祭(道ウタリ協会主催)苫小牧市で開催/D
- 2/18 ラクスマン来航 200周年記念特別展、根室市郷土資料保存センターで開催/AS
- 2/18 当博物館友の会誌「Arctic Circle」創刊/AB
- 3/13 週刊朝日「街道をゆく」で「オホーツク街道」4月3日号から開始/AS

- 3/14 アムール川流域に住むウリチ、61年ぶり最後の「クマ送り」/D
- 3/30 アイヌの伝統楽器「トンコリ」(釧路アイヌ民芸企業組合制作)が、大阪音大付属音楽博物館に展示/D

*AS朝日新聞(道東北網版)、AB網走新聞、D北海道新聞(オホーツク版)Y読売新聞(北網版)

*92.4～6の行事

- ・5/24 第1回講習会「アイヌの工芸」講師 杉村京子氏
- ・6/21 第1回講座「北方の台所について」講師 宮崎玲子氏

午後2時より当館にて。参加無料

黒田信一郎評議員 逝去

当博物館を管理・運営しております(財)北方文化振興協会の黒田信一郎評議員が逝去いたしました。生前は開館準備段階から収集委員として、多大なるご尽力をいただいております。ここに謹んで、ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

「ワンイヤー・ワンインチ」。船が入港するたびに、船員が「これぐらいは」と思い船内に持ち込んだ私物も、積みもり積もれば巨大な艦船を「1年に1インチ」ずつ沈めていく。積極的に解釈すると毎年1インチの前進ということにもつながる。英国海軍に伝わるこの警句を新聞の社説が紹介していたのを記憶している方も多いと思う。

当博物館はこの2月で開館1年を迎えた。このワンイヤー、どんな評価が出てくるだろう。これからのワンイヤー、ますます職員の心構えが、大切になる時だろう。(佐々木)